



TITLE:

京大広報 No. 509

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 509. 京大広報 1997, 509: 145-168

ISSUE DATE:

1997-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209251>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.



京大広報

No. 509

1997. 1

目次

新年を迎えて 総長 井村 裕夫……146

〈大学の動き〉

新年名刺交換会……………	147
井村総長，連合王国訪問……………	147
部局長の交替等……………	148
外国人研究者との懇談会の開催……………	148
平成9年度国立学校特別会計予算内示 （本学関係）の概要……………	149

〈部局の動き〉

学生懇話室・保健管理センター 公開シンポジウム「現代社会と青年」……………	150
化学研究所創立70周年記念式典……………	150
平成8年度文学部博物館秋季企画展の終了報告……………	151

〈栄誉〉

上野季夫名誉教授がニューヨーク科学 アカデミー会員に選ばれる……………	151
前田圭禧医学部附属病院技官が 人事院総裁賞を受賞……………	151

〈日誌〉……………152

〈訃報〉……………152

〈文化交流〉

ウォータールーで過ごした短い秋，長い冬 来海 徹太郎……………	153
------------------------------------	-----

〈保健コーナー〉

糖尿病について……………	154
--------------	-----



〈資料〉

京都大学国際教育プログラムの 実施について（第二次報告）……………	157
平成8年度京都大学市民講座講演要旨……………	163

〈公開講座〉

—公開講座終了報告— 第19回文学部博物館公開講座 「荘園と歴史的景観」……………	167
大学院エネルギー科学研究科公開講座 「エネルギーと社会・環境・技術」……………	167

〈お知らせ〉

経済研究所公開シンポジウムの開催 東アジアの「奇跡」は〈幻〉なのか……………	168
---	-----

新年を迎えて

総 長 井 村 裕 夫

新年おめでとうございます。
平成9年、1997年の年頭にあたり、本年も京都大学が一層発展いたしますよう、また京都大学の関係者の皆様が益々お元気で活躍されますようお祈りいたします。



申し上げるまでもなく本年は、京都大学が創立百周年を迎える年であります。記念行事は本来6月18日の創立記念日を中心に実施すべきでありましたが、何分梅雨の季節で行事への差しさわりが懸念されますので、11月に執り行うことといたしました。11月2日に記念式典と祝宴を行い、11月3日には哲学者のユルゲン・ハーバーマス、分子生物学者のシドニー・ブレンナー氏を迎えての記念講演会、森嶋通夫、藤澤令夫、利根川進、廣中平祐の各氏らを中心とした記念シンポジウムを計画しています。さらにその前後に、記念音楽会、百周年に因んだ展示、大学開放、全国数カ所での記念講演会など、多彩な行事の計画が進んでいます。京都大学の関係者、卒業生だけでなく、市民の方々とともに、京都大学の百周年を盛大に祝いたいと考えています。

昨年末には平成9年度予算案の内示があり、京都大学はまた新しい発展の芽を作ることができました。本年は薬学部の大学院重点化が決まり、人間・環境学研究科の環境相関研究専攻の設置も認められました。また長年の懸案であった総合博物館の設置が決まり、明年には建物の建設もできるものと期待しています。更に全国で初めての総合情報メディアセンターの設置が認められました。これによって遅れていた京都大学の情報処理教育を一気に前進させる設備ができるだけでなく、メディアを用いた新しい教育法の開発に向けて、わが国の大学をリードする一步を踏み出すこととなりました。昨年にはスペース・コラボレーション・システムが発足して大学間の講義や情報の交換が可能となりましたが、情報システムの進歩により大学教育はいま大きい変革期を迎えています。教職員の皆様はこの点を認識され、京都大学から新しい型の教育を生み出すことができるよう是非御努力をいただきたいと思ひます。

その他教育学部に臨床教育実践研究センターが設けられることとなりました。まだ小さい組織ではありますが、いじめ、不登校など現代の学童の心を蝕む問題の解決に大きく寄与されることを期待しています。

このように組織の面での改革はほぼ順調に進んでいます。何よりも大切なことは教育、研究の実を挙げることにあります。そのためには教職員の皆様の自覚と努力が何よりも重要であります。昨年は全学的な規模の教育に関する討論集会を行いましたし、一般教育に関するレビュー委員会にも活動をしていただきました。この委員会の結論は間もなく出るものと聞いています。本年からは学部学生の短期交流プログラムが発足し、世界各国から20名の学生を一年間受け入れ、また本学から同数の学生を送り出すこととなりました。このような教育の国際化の進展は、先に述べた情報化の進歩とあいまって、大学の教育が全世界から評価される時代が到来したことを示すものでありましょう。教育の改革こそ、いま京都大学が取り組むべき喫緊の課題の一つであります。

さてすでに述べましたように、本年は京都大学がその第二の世紀に向けての第一歩を踏み出す歴史的な年となります。この新しい出発にあたって重要なことを一言で表現すれば何が適当か、いろいろ考えてみましたが、結局 change という言葉を取り上げることとしました。京都大学はその100年の歴史の中で、独創的な研究者を数多く輩出しました。またわが国の各界で活躍された、あるいは活躍されつつある多くの人材を世に送り出しました。このことは未知の世界へ常に挑戦し続けた先人の、旺盛な開拓者精神に負うところが大きいと考えられます。現在の私達は、そうした京都大学の過去の栄光に安住しているのではないかという不安が、しばしば私の心をよぎります。そうならないために、私どもは絶えざる変革を続けていかねばなりません。

とくに現在のわが国は、政治、行政、経済、教育などあらゆる面で閉塞状況に陥っています。この状況を打ち破るために、大学に寄せられている期待は大変大きいものがあります。それは大学こそ、新し

い時代を切り拓く人材を育成するところだからであります。今大学のなすべきこと、それは勇気を持って教育を、大学のシステムを変革し、新しい時代を築きうる気概と個性に富んだ若者を育てることでありましょう。私が change と申し上げたのは、そのような意味においてであります。

最近のわが国のジャーナリズムの論調を見ていますと、悲観論が多いように思います。しかし私はか

つて明治維新という大転回を成し遂げた日本人のエネルギーを信じています。この一年、私は百周年の記念事業の成功と、大学変革の更なる前進のため精一杯努力したいと考えています。皆様方にとりましてもこの一年が意義深い年となりますよう祈念して、私の新年の御挨拶といたします。

(平成9年1月6日 於・京大会館)

大学の動き

新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月6日(月)午前10時から京大会館において、井村裕夫総長をはじめ、奥田 東、岡本道雄、沢田敏男元総長、西島安則前総長、名誉教授、教職員約200名の出席を得て行われた。

はじめに井村総長から新年の挨拶があり、次いで奥田 東元総長の発声による乾杯ののち歓談、午前10時50分散会した。



井村総長、連合王国訪問

井村総長は、国立大学協会訪英調査団の一員として、11月20日から11月30日までの間連合王国に出張し、以下の機関において、高等教育政策並びに教育・研究の実情を調査するとともに、政府と大学の関係者と意見交換を行った。

(訪問機関)

連合王国教育雇用省、連合王国高等教育評価委員会、連合王国大学長連合会、21世紀の高等教育のあり方を問う諮問委員会、イングランド高等教育出資委員会、連合王国工学・物理学研究評議会、グラス

ゴー大学、ストラスクライド大学、インペリアル・カレッジ、ウォリック大学、ケンブリッジ大学、ウエストミンスター大学、ブリティッシュ・カウンシル

部局長の交替等

学生部長

益川敏英学生部長の任期満了に伴い、その後任として、宮崎 昭農学部教授（熱帯農学専攻畜産資源学講座担当）が平成8年12月16日学生部長に任命された。任期は平成9年12月15日までである。



宮崎 昭教授

留学生センター長

益川敏英留学生センター長の後任として、宮崎 昭農学部教授が平成8年12月16日留学生センター長に任命された。任期は平成10年12月15日までである。

体育指導センター所長

益川敏英体育指導センター所長の後任として、宮崎 昭農学部教授が平成8年12月16日体育指導センター所長に任命された。任期は平成10年12月15日までである。

農学部附属農場長

矢澤 進農学部附属農場長の任期満了に伴い、その後任として池橋 宏農学部教授（育種学講座担当）が平成9年1月1日農学部附属農場長に任命された。任期は平成10年12月31日までである。



池橋 宏教授

外国人研究者との懇談会の開催

諸外国から来日し、本学において教育、研究に従事している外国人研究者と本学教官等との交流を促進するため、総長主催による「外国人研究者と本学関係教官等との懇談会」が12月11日（水）午後6時より京大会館で開催され、外国人研究者185名受入教官、各部局長及び国際交流委員会委員・国際交流会館委員会委員等65名及びその同伴者の計約300名が出席した。

懇談会は、井村裕夫総長の挨拶に続き、安藤仁国際交流委員長が発声による乾杯で始められ、なごやかな懇談のうちに、外国人研究者の代表2名のスピーチもあり、盛況のうちに午後8時過ぎに閉会した。



平成9年度国立学校特別会計予算内示（本学関係）の概要

平成9年度国立学校特別会計予算内示の本学関係の主な事項の概要は、以下のとおりである。

事 項	備 考
専攻の設置 （人間・環境学）環境相関研究専攻	修士課程 27人 博士課程 18人 [平成11年4月から学生受入]
専攻の再編成 農学研究科 農学ほか1専攻 経済学研究科 組織経営分析ほか1専攻 薬学研究科 創薬科学ほか2専攻	大学院重点化 修士課程 38人→87人 博士課程 23人→43人 （農薬研究施設を廃止転換） 大学院重点化 修士課程 22人→36人 博士課程 12人→18人 大学院重点化 修士課程 46人→65人 博士課程 22人→29人 学科の再編成 2 学 科 80人→1 学科 80人
入学定員の改訂 理学研究科 数学・数理解析ほか2専攻	修士課程 3人 博士課程 3人 } 連携・併任分
研究施設の整備 （理）地球熱学研究施設	地球物理学研究施設，火山研究施設を転換・統合
教育実習施設の新設 （教育）臨床教育実践研究センター	
学内共同教育研究施設の新設 総合博物館 総合情報メディアセンター	情報処理教育センター，（工）高度情報開発実験施設を転換
学内共同教育研究施設の整備 留学生センター	教官の増
事務機構等の整備 （施）機械設備課，電気情報設備課の設置 （経理）契約専門員の設置 （学生）留学生業務担当部門の充実	設備課を振替
医学部附属病院の整備 第二外科 輸血部 光学医療診療部	教官の増 〃 教官・医療職員の増
研究部門の増設 （基）非平衡系物理学研究部門	非線形物理学研究部門を廃止転換（時限10年）
研究部門の整備 （化）生体反応設計研究部門	九州大学有機化学基礎研究センターから流動定員の復帰

部局の動き

学生懇話室・保健管理センター 公開シンポジウム「現代社会と青年」

学生懇話室と保健管理センターとの共催で「心」の問題を取り上げる平成8年度公開シンポジウムを講演と対談という形式で、11月13日（水）午後2時から4時半まで薬学部記念講堂で開催し、来聴者は180名を越えた。

シンポジウムは、益川敏英学生部長と齋藤久美子学生懇話室長の挨拶ではじまり、まず大平 健氏が現代人の自己イメージ重視のあり方の歴史的背景について、次に森岡正博氏が現代社会における自分探しの問題について、それぞれ講演した。

演題と演者

「自己実現、自己表現、自己発見…といった自己〇〇について」

大平 健（聖路加国際病院神経科部長）

「ニヒリズムを考えるー現代社会において生きる意味が本当にあるのかー」

森岡 正博（国際日本文化研究センター助手）

司会 青木 健次（学生懇話室助教授）

（学生懇話室・保健管理センター）

化学研究所創立70周年記念式典

化学研究所は大正15年10月に設置され、本年をもって創立70周年を迎えた。これを記念して11月29日（金）午前10時30分から都ホテルにおいて記念講演会・展示会・記念式典及び祝賀会を挙行了た。

記念式典では、まず新庄輝也所長が「化学の多くの分野で先鋒する決意を新たにする」との式辞を述べ、小杉 隆文部大臣（代理 清木孝悦学術国際局研究機関課研究調整官）、井村裕夫総長（代理 長尾 真総長特別補佐）、文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議会長の岩崎成夫東京大学分子細胞生物学研究所長、曾我直弘大学院工学研究科長の来賓祝辞があった。また、佐藤禎一文部省大臣官房長、海外の学術交流協定機関他関係者から寄せられた多数の祝電が披露された。

続いて祝賀会が催され、西島安則前総長、本学研究所長会議世話役の阪上 孝人文科学研究所長、堀尾正雄名誉教授の祝辞の後、沢田敏男元総長の発声で乾杯、全国から出席した関係者等約400名が歓談し、午後7時盛会のうちに終了した。

また、記念式典に先立ち開催された記念講演会では、新庄所長が「金属人工格子ー新物質創製をめざしてー」、高浪 満名誉教授が「DNA シーケンシング技術の進歩ー全遺伝情報の解読に向けてー」と題した講演を行った。



一方、展示会場においては、各研究部門・施設の研究内容をパネル展示及びインターネットにより紹介し、参加者との間で活発な討議が交わされた。

（化学研究所）

平成 8 年文学部博物館秋季企画展の終了報告

平成 8 年秋季企画展が、12 月 7 日（土）終了した。展示期間中の、入館者数は次のとおりである。

期 間	展 示 の 名 称	入 館 者 数				
		一 般	学 生	職 員	特別観覧	計
10/29 12/ 7	企画展「荘園を読む・歩く―畿内・近国の荘園―」 常設展「日本古代文化の展開と東アジア」	人 588	人 241	人 178	人 530	人 1,537

（特別観覧とは学術研究、視察その他博物館運営研究及び施設見学等である。）

（文学部）

栄 誉

上野季夫名誉教授が ニューヨーク科学アカデミー会員に選ばれる



1996年11月、上野季夫名誉教授はニューヨーク科学アカデミー（Serving Science, Technology, and Society Worldwide Since 1817）会員に選ばれた。

上野名誉教授は1937年に京都帝国大学理学部宇宙物理学科を卒業、理学部講師、助教授を経て1959年から1970年まで教授（天体物理学担当）を務めた。その後渡米し、南カリフォルニア大学文理学部客員教授、電気工学部教授を1973年まで歴任。帰国後、金沢工業大学教授に就任し、情報科学研究所所長、研究部長を歴任した。1987年京都コンピュータ学院情報科学研究所

所長に就任し現在に至っている。

上野名誉教授は輻射輸達方程式の厳密解法については世界の第一人者である。不変埋蔵法と呼ばれる方法を開発して、2点境界値問題を微積分方程式の初期値問題に還元し数値解析的に解くことに成功した。これはもともと恒星大気の中で吸収線形成や多重散乱光に用いられた手法であるが、天体現象のみならず、中性子の輸送、リモートセンシングによる画像処理、医学療法、制御理論等々に応用されそれらの発展に大いに寄与している。

また国際的な学術雑誌“Astrophysics and Space Science”等の編集委員も務めている。

（大学院理学研究科）

前田圭禧医学部附属病院技官が 人事院総裁賞を受賞



12月6日（金）、明治記念館（東京都港区）において第9回人事院総裁賞の授与式が行われ、医学部附属病院病態栄養部前田圭禧栄養管理室長が人事院総裁賞を受賞した。

人事院総裁賞は、それぞれの

職場において職務に精励している国家公務員を対象に、多年にわたる労苦や不断努力、また業務上の顕著な功績を評価し、讃えることを目的として、昭和63年に人事院において創設されたものである。

今回の受賞は、管理栄養士として治療食を創意工夫し治療効果を上げるとともに、論文、著書等を通じ食事療法及び栄養管理の普及に寄与してきたこと

が認められたものである。

同氏は、昭和38年1月医学部附属病院に採用以来33年の長きにわたり栄養管理業務に従事し、この間、臨床栄養学分野において先端的な研究を行った。特に人工透析患者の治療食、白血病患者に対する無菌食等、独自性にあふれた治療食を開発した。

また、栄養管理についてその普及、啓蒙に努めた。

このたびの受賞は、京大病院の中で治療栄養業務に専念している職員に光があてられたものであり、誠に喜ばしい。

(医学部附属病院)

日誌

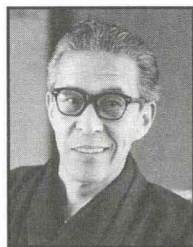
1996年11月1日～11月30日

11月1日 タイ王国 Sanga Sabhasri 上院議員他3名来学、総長及び関係教官と懇談
5日 評議会
8日 チリ共和国国家科学技術研究会議 Enrique d'Etigny 会長他2名来学、総長及び関係教官と懇談
〃 将来構想検討委員会
9日 文学部博物館公開講座「荘園と歴史的景観」(以後の日程は、16日、30日、12月7日)
11日 中華人民共和国科学院 路 甬祥副院長他1名来学、関係教官と懇談
12日 平成8年度京都大学監督者(係長級)研修(15日まで)
15日 アメリカ合衆国インディアナ大学 George E. Walker 副学長他1名来学、

総長特別補佐及び関係教官と懇談
19日 評議会
〃 建築委員会
20日 総長、国立大学協会訪英調査団の一員として、高等教育政策並びに教育・研究の実情を調査するため、連合王国を訪問(30日まで)
〃 カナダ国マギル大学 Bernard J. Shapiro 学長他3名来学、総長特別補佐及び関係教官と懇談
〃 国際交流委員会
〃 国際交流会館委員会
22日 ニュージーランド国マッセイ大学 J.A. McWha 学長他2名来学、総長特別補佐及び関係教官と懇談
25日 教育課程委員会

訃報

田中 周友 名誉教授



本学名誉教授 田中周友先生は、11月14日逝去された。享年96。

先生は、大正13年京都帝国大学法学部を卒業され、同大学法学部助手、助教授を経て昭和8年教授に昇任、同20年に一旦退官されたが同23年再び教授に就任され、羅馬法講座、独逸法講座、佛蘭西法講座、西洋法制史講座を兼任された。この間、昭和15年から17年まで評議員、同25年から27年まで法学部

長、同28年から30年まで学生部長、同32年から38年まで附属図書館長を務められ、大学の管理運営にも貢献された。昭和38年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後は、甲南大学及び京都産業大学の専任教授として研究・教育に尽力された。

先生は、その主著『世界法史概説』の中に凝縮されているように、実に幅広い問題に関心をもたれ、学界に多くの寄与をされた。現在でも、先生の設定された学問的な枠組みをこえる業績はなく、逆に、世界各地域の個別法研究へと学問の細分化が進んでいる状況下では、先生の提示された「世界法・世界

糖尿病や糖尿病予備群である耐糖能の異常者をより多く検出できます。

さて糖尿病は、膵臓から分泌されるインスリンの量的不足または作用不足により、血液中のブドウ糖の利用が低下し、その結果、血糖値が上がる病態をいいます。この高血糖を長期間放置しておくと身体の色々な場所に合併症としていろいろな障害が出現します。

糖尿病といってもその原因はさまざまですが、インスリン分泌能の程度により、つぎのように2つに大別できます。

病型	インスリン依存型糖尿病 (Ⅰ型糖尿病)	インスリン非依存型糖尿病 (Ⅱ型糖尿病)
頻度	5 %	95 %
年齢	若い人に多い	成人に多い (最近、子供も増えている)
発症	突然	ゆっくり
体型	やせ型	肥満型
治療	初めからインスリン注射	まず食事、運動療法から

Ⅰ型糖尿病はウイルスの感染、自己免疫により膵臓のインスリン分泌細胞が破壊され完全にインスリンが欠如する病態です。一方、Ⅱ型糖尿病は日本における成人糖尿病の大半を占め、緩徐なインスリン分泌の不足や作用不足が原因です。

糖尿病(Ⅱ型糖尿病)になりやすい人とそうでない人がいますが、その差を決めているのが危険因子です。危険因子には、肥満、運動不足、過食、飲酒、心身ストレス、遺伝因子などがありますが、そ

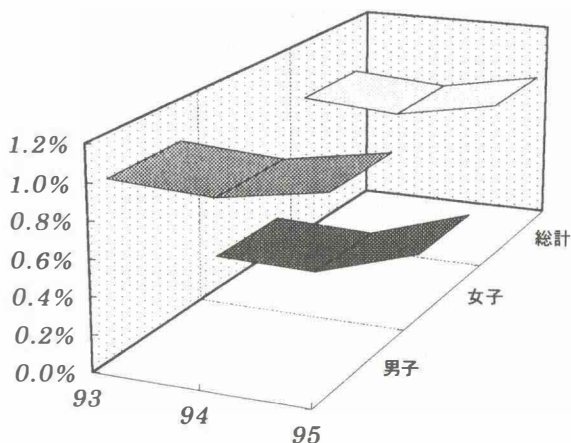
れを多く持っている人が糖尿病になりやすいのです。平成7年度京都大学学生定期健康診断について肥満度の指標であるBMIを計算し、全学生を性別、年齢別に分類したのが図2です。女子学生は入学時と殆ど変わらないのですが、男子学生では年齢と共に肥満の割合が増加しています。

高血糖を放置していると様々な障害が出現します。これらの糖尿病合併症がはっきりするまでには年月がかかり、初めのうちはほとんど自覚症状はありません。糖尿病の3大合併症として網膜症、腎症、神経症がありますが、網膜症とは、網膜の酸素欠乏状態により非常に脆い新生血管ができ大出血を起こす可能性のある状態です。出血すると、網膜が剝離し失明してしまいます。腎症とは、高血糖により腎臓細胞が徐々に傷害され、尿蛋白、高血圧が出現し、老廃物をろ過する力が失われ尿毒症になります。こうなると人工透析しなければならなくなります。神経症とは手足のしびれから始まる障害です。最後に痛みなどがわからない状態になると、足の病変などが加速的に進行します。動脈硬化も進行すると足の血管が詰まり足の先が壊死を起こします。その際に足のキズからバイ菌が進入すると足を切断しなければならない状態になります。そのほか重い合併症として脳梗塞、狭心症・心筋梗塞などがあります。

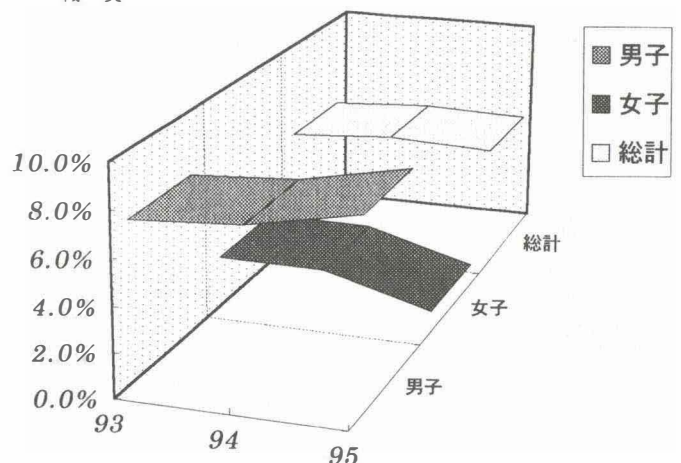
糖尿病は多くの場合、食事、運動療法などによりライフスタイルを改善し危険因子を除去できれば高血糖状態は改善します。糖尿病であっても良好な血

図1 定期健康診断時の尿糖陽性者
(検尿 全受検者に対する%)

学 生



職 員



糖コントロール状態であれば、合併症は進行せず健康な状態が維持できるわけです。糖尿病治療の基本は食事療法です。医療機関で指導している糖尿病食は、バランスの取れた健康食です。適正摂取カロリーと配分を守っていれば健康的な生活と長い寿命が達成できます。まず、悪い食生活のパターンを示します。1) 夕食の比重が高い、2) 食品の偏りが多い、3) 食事時間が不規則である、4) 朝食を抜くことが多い、5) 日によって食べる量の差が大きい、6) 調理済食品が多い、7) お菓子類が多い、8) 残り物などもったいないと思いきって食べてしまう、9) ながら食いをする、10) 早食いである。一方良い食生活のパターンは次のとおりです。1) 3食のバランスは等分にする、2) 食事時間は規則正しく、3) 3大栄養素を偏りなく補給する、4) 食事は落ち着いて良く噛んで食べる。

つぎに運動療法について述べてみましょう。運動療法の効用として、1) 血液中のブドウ糖をエネルギーとして消費する。2) インスリン作用を増強させることがあげられます。酸素を十分取り込みながら血液中のエネルギー源である血糖を燃やし、またその後は皮下脂肪などを取りくずしながらエネルギーの補給を行う持続的な運動が運動療法の基本です。運動をしながら隣の人と会話ができ、あまり息が上がらない程度、なおかつ、30分運動するとシャツを替えたくなるほど汗をかく程度です。運動中の脈拍があがりすぎないように注意しましょう。最

160 kcal 消費するのに必要な時間

運動の強さ	種 目	分
軽	歩 行	44
	ラ ジ オ 体 操	54
	自 転 車	54
中	階段のぼり	30
	ジ ョ ギ ン グ	30
	床 掃 除	28
強	な わ と び	24
	平 泳 ぎ	16
	バレーボール	16

低、1日に160 kcal (お茶碗1杯のご飯のカロリー)を運動で消費するようにしましょう。それには表のような持続的な運動が必要です。徐々に時間を増やしていき持続的な運動を160 kcal とバーベル・短距離走等の筋力増強運動：80 kcal の計240 kcal を目指しましょう。早朝や空腹時よりも食後1～2時間がよいです。できれば毎日、少なくとも週3回以上行ってください。運動療法を始める前には必ず主治医と相談の上で始めるようにしましょう。

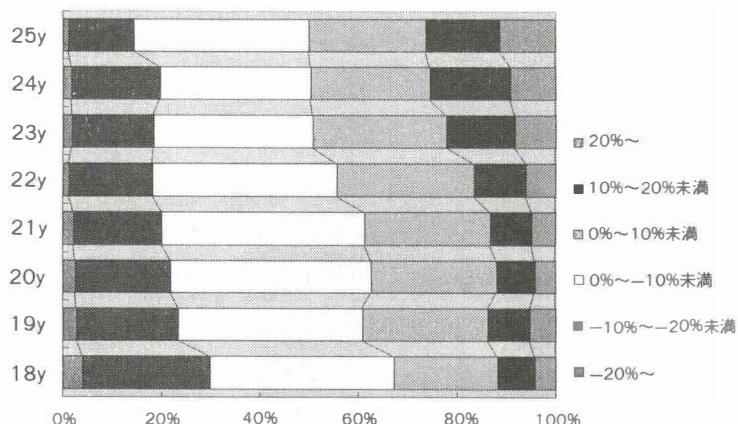
さて京都大学の定期健康診断後に尿糖陽性者について再検討をするのですが、毎年新たに要治療者が出てきます。全学生で5名内外、全職員で20名弱の人が糖尿病患者として加わるわけです。毎日の食事や運動に注意し、健康的な生活を送りましょう。

(保健診療所 青野 充)

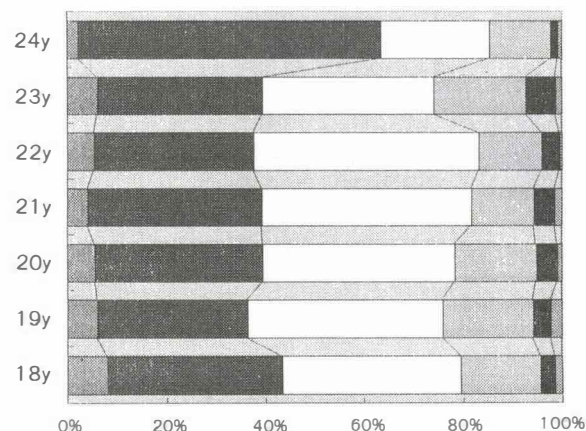
図2 肥満度 (BMI)

(平成7年度京都大学学生定期健康診断より)

男 子



女 子



資料

京都大学国際教育プログラムの
実施について（第二次報告）

平成 8 年 11 月 25 日

国際教育プログラム
準備委員会

本準備委員会は、本年 3 月 14 日の「京都大学国際教育プログラムの実施について（第一次報告）」において、短期留学制度の意義、国際教育プログラム（以下「KUINEP」という。）の概要、実施体制のあり方、必要な条件整備・基盤整備について報告し、関係各位の理解と協力を依頼した。

準備委員会では、引き続き、短期留学制度、KUINEP を発足させるために残されたいくつかの課題について詳細に検討してきた。以下にまとめたのが委員会で検討した事項である。京都大学にとっては、未経験の新しい事業であるので、各部局及び関係委員会の理解と協力を重ねてお願いする。

1 KUINEP 学生の募集・受入手続き

(1) 募集手続き

平成 9 年 10 月の KUINEP 学生受け入れに関する全体のスケジュールに則って本年 11 月 1 日付けで募集要項を発送した。送付先は別紙 1 の 16 大学であり、応募締め切りは、9 年 1 月末日としている。

KUINEP は、本学と一般的覚書及び学生交流協定を締結している外国の大学に所属する学生を対象に募集することを原則としているが、現段階では締結に至っていないが現在学生交流協定の締結に向けて交渉を継続中であり、KUINEP 開始時までには環境の整う見込みの大学も含めている。

また、奨学金の申請時期（2 月）の関係から締め切りを早めに設定しているが、今回が初年度であり協定等の環境整備に時間を要すること、及び奨学金は第 2 回目の申請（5 月）でも間に合うことから、締め切りについては柔軟に対応することとする。上記の 16 大学以外にも学生の派遣に積極的で、今後の交渉の進展により環境が整うことが見込める大学については、追加で募集要項を発送する。

(2) 受入手続き

協定校は、KUINEP に参加を希望する学生（以下「KUINEP 学生」という。）に関する申請書類を取りまとめ、所定の期日までに京都大学に送付する。複数の学生を推薦する場合は、推薦順位を付す。

京都大学においては、KUINEP 実施のための委員会（仮に「実施委員会」とする。）において選考し、受け入れを許可しようとする学生については、実施委員会が受入学部を決定し、各学部を受け入れを依頼する。

KUINEP 学生は、本人の専攻と希望により各学部の特別聴講学生とするが、どの学部にも所属させるかの判断は実施委員会が行い、最終的な受け入れ決定は各学部が行う取り扱いとする。

(3) 特別聴講学生としての受入手続き

各学部においては、本年度中に特別聴講学生の受入手続き等に関する学部内の規定整備を行うことが望ましい。KUINEP 学生に関する特別聴講学生願書については、全学的に共通の様式（別紙 2）とする。

KUINEP 学生募集から受け入れに伴う事務の流れを図示すると、別紙 3 のとおりとなる。

2 提供科目の取り扱い

(1) 全学共通科目上の取り扱い

KUINEP のために新たに開発した 16 の科目については、全学共通科目として扱われるよう教育課程委員会に届け出等の手続きを行う。平成 9 年度に開講される 8 科目について手続きを行った。（別紙 4）

(2) KUINEP 学生の履修

KUINEP 学生に対しては、1 学期に開設される 8 科目のうち 6 科目以上の履修を奨励し、KUINEP 申請時に受講希望科目を聴取し、来日後にオリエンテーションを実施した後、履修登録手続きを行う。

(3) 一般学生の履修

KUINEP 科目は、受講定員を 40 名とする。一般正規課程学生の定員は、各科目 20 名を原則とする。全学共通科目の電算処理の関係で、一般

学生の履修手続きは、前期（春学期）、後期（秋学期）開設分をあわせて4月中に予備登録をさせ、定員を上回る場合には、適宜、抽選等により受講者を決定し、一般の全学共通科目と同様に5月初旬に登録手続きを行う方法とする。

(4) 科目コーディネーター

複数の教官がリレー式に講義を行う科目については、それぞれの科目毎に科目コーディネーターを置く。

科目コーディネーターは、次の三点を担当する。①各担当教官によって作成されたシラバスをつなぐ科目概要（オーバービュー）の作成、②各担当教官の授業内容、授業日程（順番）の調整、③各担当教官の評定のとりまとめ及び履修学生に対する成績評価。

(5) 成績評価及び単位認定

KUINEP 科目は、各科目毎にレポート試験、筆記試験等により成績を判定する。各学部は、科目コーディネーター又は科目担当教官から提出された成績判定により単位を認定する。

(6) 日本語教育

KUINEP 学生に対しては、留学生センターが日本語教育を提供する。提供する日本語教育は、3クラスとし、通年の特別授業科目として開設する。各学期ごとに週4コマの授業を提供する。学期のはじめにプレースメントテストを行いクラスを決定する。1クラスは10名を限度とする。

レベルⅠは、日本語の学習経験のない学生を対象に修了時において日本語能力試験4級程度を到達目標に、レベルⅡは、150時間程度の学習歴のある学生を対象に同3級程度を到達目標に、レベルⅢは、レベルⅡ修了程度の学生を対象に同2級程度を到達目標に実施する。

日本語教育を修了して一定の成果を修めた学生に対しては、修了認定書を交付する。

参考までに、授業時間割表を添付する。（別紙5）

3 京都大学学生の派遣

学生交流協定は、相互交流協定であるので、KUINEP の参加校に対して本学学生、特に学部学生を積極的に派遣することが可能であり、学生派遣は KUINEP 開設の目的でもある。学生の派遣は、ある程度の制度化が必要であり、協定校における短期留学生の受入プログラム、応募資格要件、受け入れ体制等の情報を収集・整理し、本学学生に周知する必要がある。

このため、国際交流委員会において学生派遣についての検討が進められているが、本格的な実施にはなお時間を要するので、来年度は試行的に一部の大学を対象に派遣学生の募集が進められている。

4 受入体制

(1) 講義室

講義室については、40人規模の専用講義室が必要であり、留学生センター内の教室（LL 教室、通称「階段教室」）を改修を使用することとする。同建物は保存指定建物であることから、指定要件に配慮して改修を行うこととする。

(2) 宿 舎

KUINEP が全学の協力体制の下に推進される事業であることから、KUINEP 学生に対して大学が責任を持って宿舎を確保する必要がある。KUINEP 学生は、奨学金が得られたとしても国費奨学金よりはかなり低額であるため安価な、かつ、条件の一定した宿舎が望ましい。この件に関しては、国際交流会館委員会及び関係部課において留学生全体の宿舎事情を勘案しながら、対応策が検討されている。

(3) 奨学金

KUINEP 学生の生活条件を一定にするためには、全員に奨学金が授与されるのが望ましい。このため、活用を予定している日本国際教育協会の短期留学奨学金への申請において、これまでの各部局の採択実績に配慮しながら、KUINEP 学生に関してはできるだけ別枠で確保されるよう努力する。

別紙 1

国際教育プログラム（KUINEP）募集要項送付先

平成 8 年 11 月 1 日現在

国 名	大 学 名	覚書締結校	学生交流協定	送付の有無
ア メ リ カ	カリフォルニア大学	○	○ (6)	◎
カ ナ ダ	トロント大学	○	△ (2)	◎
英 国	サセックス大学	○	○ (3)	◎
ド イ ツ	ボン大学	○	△ (2)	◎
	ハイデルベルク大学	○	△ (2)	◎
	ベルリン自由大学	○	△ (2)	◎
ス イ ス	スイス連邦工科大学	○	△ (2)	◎
	チューリッヒ大学		△ (2)	◎
	ローザンヌ大学		△ (2)	◎
オ ラ ン ダ	ライデン大学		△ (2)	◎
	ユトレヒト大学		△ (1)	◎
オーストリア	ウィーン大学	○	△ (2)	◎
スウェーデン	ウプサラ大学		△ (2)	◎
	ストックホルム大学		△ (2)	◎
オーストラリア	メルボルン大学		△ (2)	◎
ニュージーランド	オークランド大学		△ (2)	◎
10 か 国	16 大 学			

1) △印は、数か月以内に学生交流協定締結の見込める大学。() 内の数字は、交換学生数。

2) 上記は、第 1 次発送先であり、今後の交渉進展により発送先が追加されることがある。

別紙 2

TRANSFER STUDENT APPLICATION

特別聴講学生願書

Date: _____ / _____ / _____
Day Month YearTo: The President of Kyoto University
京都大学総長 殿

Name:

(名前)

(Family name)

(First name)

(Middle name)

Date of birth:

(生年月日)

Day

Month

Year

Signature:

(署名)

I request to be allowed to take the courses listed below as a transfer student.

貴学の特別聴講学生として下記のとおり聴講したいので許可願います。

1. Period:

(聴講期間)

From:

Month

Year

Until:

Month

Year

2. Courses:

(聴講授業科目)

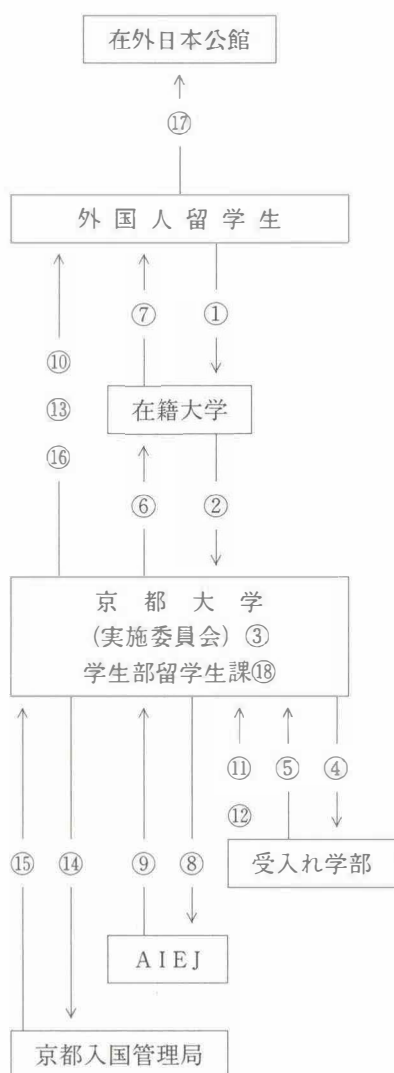
Fall Semester (Oct. 1997~March 1998)

(前期)

Spring Semester (April 1998~Sept. 1998)

(後期)

KUINEP 学生受入れに伴う事務の流れ



- ① KUINEP 応募書類を在籍大学に提出。
- ② 在籍大学より京都大学へ応募書類を送付。(1 月末日締切)
- ③ 実施委員会開催—受入れ学部を決定。
- ④ 受入れ学部に特別聴講学生としての受入れを依頼。
- ⑤ 受入れ学部より受諾の通知。
- ⑥ 在籍大学に選考結果を通知。(2 月末日)
- ⑦ 在籍大学より本人へ選考結果を通知。
- ⑧ AIEJ へ短期奨学金の申請。
- ⑨ AIEJ より短期奨学金の採用結果通知。
- ⑩ 本人へ短期奨学金の採用結果通知。
- ⑪ 受入れ学部より入学許可通知に関する書類を発行。
- ⑫ 特別聴講学生の証明書(在留資格認定証明書交付申請のため)を発行。
- ⑬ 本人へ入学許可通知に関する書類を送付。
- ⑭ 在留資格認定証明書交付申請
 - ・京都入国管理局に、在留資格認定証明書交付申請のための書類を提出。
- ⑮ 認定証明書交付。
 - ・申請書類を受理し、内容審査のうえ可否を決定。
 - ・京都大学に対し、認定証明書交付。
- ⑯ 認定証明書を本人へ送付。
- ⑰ 在外日本公館(大使館・領事館)に、交付された在留資格認定証明書を添付の上、査証申請を行う。
- ⑱ 宿舍手配、渡日調整等。

別紙 4

平成9年度国際教育プログラム開講科目一覧

1 後期（秋学期）開設科目

提供部局	授業科目	科目区分名	群	単 位 数	開講期	対 回 象 生	対 象 学 生	H 授 業 数 9 コマ
留学生センター	COMPARATIVE ECONOMICS I	教養・専門基礎	A 群	2	後期	2～4		0.5
留学生センター	SOCIAL AND INTERNATIONAL RELATIONS I	教養・専門基礎	A 群	2	後期	2～4		0.5
留学生センター	JAPANESE CULTURE AND ARTS	教養・専門基礎	A 群	2	後期	2～4		0.5
留学生センター	ECONOMIC SYSTEM OF JAPAN	教養・専門基礎	A 群	2	後期	2～4		0.5
留学生センター	EDUCATION AND TRADITION IN JAPAN	教養・専門基礎	A 群	2	後期	2～4		0.5
留学生センター	THE 21ST CENTURY AND FOODS	教養・専門基礎	B 群	2	後期	2～4		0.5
留学生センター	CITIES IN THE 21ST CENTURY	教養・専門基礎	A・B 群	2	後期	2～4		0.5
留学生センター	NATURE AND GEOGRAPHY OF JAPAN	教養・専門基礎	A・B 群	2	後期	2～4		0.5

（参考）平成10年度前期（春学期）開設予定科目

提供部局	授業科目	科目区分名	群	単 位 数	開講期	対 回 象 生	対 象 学 生	H 授 業 数 10 コマ
留学生センター	COMPARATIVE ECONOMICS II	教養・専門基礎	A 群	2	前期	2～4		0.5
留学生センター	SOCIAL AND INTERNATIONAL RELATIONS II	教養・専門基礎	A 群	2	前期	2～4		0.5
留学生センター	JAPANESE MANAGEMENT SYSTEM	教養・専門基礎	A 群	2	前期	2～4		0.5
留学生センター	THE MODERN JAPANESE SOCIETY	教養・専門基礎	A 群	2	前期	2～4		0.5
留学生センター	LAW AND POLITICS IN JAPAN	教養・専門基礎	A 群	2	前期	2～4		0.5
留学生センター	LIFE SCIENCE	教養・専門基礎	B 群	2	前期	2～4		0.5
留学生センター	ENERGY AND ENVIRONMENT	教養・専門基礎	A・B 群	2	前期	2～4		0.5
留学生センター	INFORMATION AND SOCIETY	教養・専門基礎	A・B 群	2	前期	2～4		0.5

別紙 5

国際教育プログラム授業時間割

平成9年度後期（平成9年10月～平成10年3月）

曜日 時間	月	火	水	木	金
Ⅱ 10:30～ 12:00	Comparative Economics I	Economic System of Japan	Japanese Culture and Arts	Nature and Geogra- phy of Japan	Education and Tradition in Japan
Ⅲ 13:00～ 14:30	Social and Interna- tional Relations I	Cities in the 21st Century	The 21st Century and Foods	Japanese Language	Field Trip or Independent study
Ⅳ 14:45～ 16:15		Japanese Language	Office Hours	Japanese Language	
Ⅴ 16:30～ 18:00		Japanese Language			

平成10年度前期（平成10年4月～平成10年9月）

曜日 時間	月	火	水	木	金
Ⅱ 10:30～ 12:00	Comparative Economics II	Japanese Manage- ment System	The Modern Japanese Society	Law and Politics in Japan	Information and Society
Ⅲ 13:00～ 14:30	Social and Interna- tional Relations II	Energy and Environment	Life Science	Japanese Language	Field Trip or Independent study
Ⅳ 14:45～ 16:15		Japanese Language	Office Hours	Japanese Language	
Ⅴ 16:30～ 18:00		Japanese Language			

平成8年度京都大学市民講座講演要旨

本年度の京都大学市民講座は、「ととのえる」を共通テーマとして、10月19日から11月2日までの毎週土曜日午後、3回にわたり法経第4教室において開講した。

講義科目と講師は次のとおりであり以下に講演要旨を掲載する。

都市をととのえる

工学研究科教授 青 山 吉 隆

食と環境をととのえる

農学部教授 嘉 田 良 平

文化習慣をととのえる

文学研究科助教授 松 田 素 二

心をととのえる—フロイトの自己分析— 人間・環境学研究科助教授 新 宮 一 成

ライフスタイルをととのえる

—糖尿病をふせぐために—

医学研究科教授 清 野 裕

生涯学習をととのえる

教育学部教授 上 杉 孝 實

都市をととのえる

工学研究科教授 青山 吉 隆

「神は田舎を創り、人は都市を創る」という先人の言葉がありますが、都市は人類が創りだした最大の資産でしょう。人類は古代から現在まで、都市をととのえてきましたから、都市はその時代のその民族の文明のショーウィンドーのようなものです。人類の永い文明の中で、都市をととのえる目的は時代によって変わってきました。都市防衛、支配階級の楽しみ、宗教、修景、城下町、市民生活の向上、公衆衛生などです。理想的な都市の実現を目指す提案も多く行われました。たとえばハワードによる田園都市、オースマンによるパリ大改造、さらにル・コルビジェの大都市など。現代のニュータウン、ラ・デファンスの再開発(写真1)や、新宿などの再開発計画はこれらの影響を受けています。

物づくりのキーワードは、用・強・美と言われます。用は役に立つこと、強は安全なこと、美はもちろん美しいことです。我々は、近代以降まず「強」、

写真1

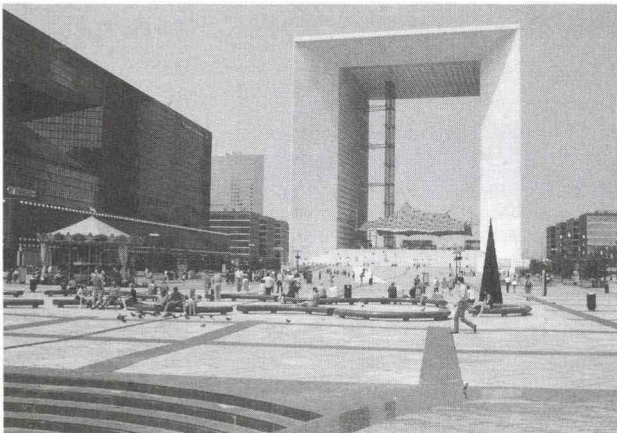


写真2



つまり防災に重点を置きました。地震、台風、火災、洪水など、安全な都市づくり、国づくりがすすめられました。しかし阪神淡路大震災はまだ「強」が不完全なことを示しました。そして戦後、「用」、つまり生産に役立つことに重点を置いて、都市をととのえてきたのです。そしてこれからの日本は「美」が大事だということになりました。ここでいう美とは、楽しさ、優しさ、美しさ、快適さなど生活環境全体のグレードアップを目指してととのえようということです。アメニティ、景観、ボンネルフ(写真2)、モール、ラドバーン、クルドサック、バリアフリーなどおおくのアイデアが都市づくりに生かされ始めています。しかしまた21世紀にむけて、わが国は高齢化社会、地球環境、住民参加、地方分権など、都市をととのえるための多くの課題を抱えています。

(平成8年10月19日講演)

食と環境をととのえる

農学部教授 嘉田 良 平

今年に入って、狂牛病や病原性大腸菌 O-157 の事件によって消費者の不安は大きく広がった。どうやら日本という豊かな社会の食のシステムに微妙な狂いが生じ始めたようである。しかも、21世紀には地球規模での食料危機が訪れるのではないかとの不気味な予測もある。食をととのえるためには、地球

環境問題にもメスを入れざるをえない。

今年11月にローマで開催される世界食料サミットの主要テーマは食糧安全保障である。たしかに世界各地、特に開発途上国においては、一見、食料生産は増大していても、実は不適切な土地利用などのために土壌劣化や塩害を増大させている。重要なことは、これらの環境劣化を防止し適切な資源管理がで

きるのは、それぞれの国や地域の農民だという点である。この資源管理というコストを伴う作業に、いかに真正面から草の根方式で立ち向かうかが、世界の食糧安全保障の重要なポイントとなりそうである。この点では、世界一の援助大国となった日本の役割もますます大きい。

それでは、地球的規模で環境問題が問われるなか、生命と生活を守るという視点に立てば、日本は今後どうあるべきなのか。次の3つの方向性がとりわけ重要であろう。第一に、検疫体制を強化し、原産国表示を徹底化することによって、消費者に安全・安心を保障すること。第二に、極端な輸入依存型となっている日本の食料供給体制を見直すとともに、消費者に対しても、本来の栄養・健康につなが

る食生活の見直しが求められる。そして第三は、人と自然にやさしい環境保全型の農林水産業の立て直しを図ることである。

いずれにせよ、日本にとっての食糧安全保障は、このように量と質の両面から抜本的に点検し直すべき時にあると思われる。長期的観点からは、やはり安全な食と環境、そして地域づくりの視点に立って日本農業と農政を再構築する作業も急務である。そのためにも消費者の理解と協力は不可欠であり、都市と農村が手を携えて、地域の足元から食料の確保と環境の保全に向けて、具体的に行動を起こすべき時ではなかろうか。

(平成8年10月19日講演)

文化習慣をととのえる —アフリカのフィールドワークから

文学研究科助教授 松 田 素 二

文化人類学という学問は、これまで世界各地の文化的習慣を研究し人類文化の多様性を明らかにしてきました。ある文化からすると、一見奇異な習慣や制度が、じつはよく考えられた合理的なシステムであった、ということを人類学者は「発見」し報告してきたのです。そこにおいて文化的習慣は、世代を超えて受け継がれてきた変わることのない実体としてイメージされていました。

ところがこの10年あまりのあいだに、こうした人類学の姿勢を根底から疑い解体しようという動きが強くなってきました。それは、異文化に出かけていって、奇異な習慣を得意げに「発見」し解説する人類学という学問のあり方への問いかけでもありました。

この旧来の人類学のパラダイムへの批判を受けて、現在新しい人類学の可能性を求める実験的な試みが続けられています。そのなかで焦点の一つとなっているのが、今回の講座のテーマとなっている文化的習慣をめぐる問題です。文化的習慣の多く

は、それを実践している当該文化の成員にとって、理屈抜きのものでした。たとえば神社にいて柏手を打つという習慣の意味を問い詰められても、私たちはうまく説明できないのが普通でしょう。これは文化のオートマティズムの問題です。あらゆるものを言語化し論理化する西欧近代の知の様式とは異なった様式がそこには垣間見られます。このような日常的な知の可能性を生活のなかから探ることも、今、人類学の重要な課題となっています。

たしかにこれまでの文化論においては、個人に外在して個人を拘束する文化の側面が強調されてきました。ところがこのオートマティズムの見方に従うと、従来の型を微妙に変更する個人の実践や、従来の意味を換骨奪胎してしまう行為こそが、文化を支え生成しているということが見えてきます。そしてこうした微細な文化の創造者としての視点は、これまでの人類学のパラダイムを革新するものではないかとも思えるのです。

(平成8年10月26日講演)

心をととのえる—フロイトの自己分析—

人間・環境学研究科助教授 新 宮 一 成

精神分析は19世紀の末にジグムント・フロイトによって神経症の治療法として開拓された。しかし治療法としての有効性が確かめられても、それを裏付けるための心の一般理論がなかったら、それはまだ科学的な方法とはいえない。そこでフロイトは、夢という現象の中に、そのための一般理論を構築する場を求めた。

フロイトはそれまでの治療の中で、神経症の症状形成のプロセスは、夢の形成過程と似ているということに気付いていた。そこで、一般の人の夢の形成過程を明らかにすることができたなら、神経症の症状形成にあずかる心の深い層にも光を当てることができるだろうと考えられた。こうしてフロイトは夢の研究に取り組み、夢と症状の両方を支えている精神作用、すなわち無意識の過程を発見することができたのである。その際にフロイトが調べたのは自分自身の夢であった。彼は自分の夢と、自分の生活の中の出来事とを丹念に調べて、その間にどのような

関連があるのかを次々と明らかにしていった。その結果彼が到達した結論の骨子は、夢は偽装された願望充足であるということである。

夢で充足される願望の核は、自分の生存を一つの「現実」として確証したいということである。我々は否応なく言語的・社会的な構造の中に生きているため、自分の生存が現実として果たして認められているのかどうかを不安に思う。言語の世界の中には「自己言及」という原理的な限界があるため、誰にとっても、自分に深く関わることほど、本当に現実なのかどうかを確認しにくくなってゆくのである。こうした苦しさに対して夢が助け舟を出す。夢で満たされるのは、科学の対象と同じような現実性が、自分の生存にも備わっているはずだとする我々の願いなのである。夢に現れる不気味なものは、その現実性を表現している。たとえそれがいかほど不気味であろうとも、それが夢見る人の生存の現実である。

(平成8年10月26日講演)

ライフスタイルをととのえる —糖尿病をふせぐために—

医学研究科教授 清 野 裕

現在すでに発症している人が全国で600万人、40歳以上では、10人に1人が罹病（病気になること）。まだ発症はしていないが、血糖値に異常が認められる人が1,200万人。なんだか品のない感嘆符のつるべ打ちになったが、これが平成日本の糖尿病の現状である。

糖尿病で怖いのは、最初は殆ど症状のないことである。しかし油断して放置すると病気が進むにつれて現れる合併症に苦しむ。これで眼をやられ、神経をやられ、腎臓をやられ、心臓をやられることも多く、患者の社会生活は著しい制約をうける。

糖尿病は遺伝的な体質をうけついでもの（極論すると国民の2人に1人）に加齢、過食、肥満、運動不足、ストレスなどの環境的な負荷が加わって発症

する。しかし、第二次世界大戦直後我が国には殆ど糖尿病患者はみられなかったことを考えると、ライフスタイルの急速な欧米化が患者の増加を促していることは疑う余地もない。例えば糖尿病では甘いものをはじめとする糖分の取り過ぎということがよく言われているが、実際にはそうではなくて脂肪の摂取量と糖尿病患者の増加が平行している。さらに自動車の登録台数と糖尿病患者の数も比例して増加している。

片寄りのない栄養摂取や適度の運動、という体を整えるのに基本的なことが守られていないために糖尿病が起こる。したがって体を整える、つまり正しいライフスタイルを守ることによって糖尿病の発症や、発症した糖尿病の進行は防止できる。

(平成8年11月2日講演)

生涯学習をととのえる

教育学部教授 上 杉 孝 實

生涯学習は、個人が主体的に生涯にわたって行う学習であり、学校や社会教育機関においてはもとより、さまざまな集団や場においても展開されるものである。それらには、何らかの課題解決をめざしてのものもあれば、人間性を追求してのものもある。これらの学習が、計画性をもって行われ、成果をもたらすものとなるように整えることが課題となっている。それは自己教育ともよばれるものであり、みずからが学習を方向づけるのである。そのために、学校における学習意欲の喚起、学習方法の習得、基礎学力の形成が重要になる。

生涯学習を支えるために、さまざまなしくみが存在する。図書館・博物館のほか、日本の公民館、北欧やドイツの民衆大学、イギリスの成人教育センターなどがあるが、学校開放についても、イギリスやアメリカの大学拡張やスウェーデンの大学における成人学生の大幅な受入れなど、さまざまなとりくみが見られる。生涯教育・生涯学習を支えるしくみ

を整える施策は、1965年ユネスコにおける P. ラングランの提起以来、国内外で広がっていて、日本でも1971年の社会教育審議会答申、1971年、1981年の中央教育審議会答申、1984～1987年の臨時教育審議会答申、1990年の生涯学習振興整備法、1992年、1996年の生涯学習審議会答申などがあるが、社会教育法の意義についても再認識する必要がある。

自治体においても、生涯学習推進計画を立てているところは少なくない。学習情報の提供、学校教育と社会教育の連携、ライフ・ステージ別の課題設定などが目につく。リカレント教育についても、生涯職業能力の形成を保障する公的職業教育機関の拡充が求められることになろう。再び職に就いたり、学校に入るための準備を行う、「セカンド・チャンス・コース」の充実も課題となっている。「第三年代の大学」へのとりくみも国際的に進展を見せている。

(平成8年11月2日講演)

公開講座

—終了報告—

○第19回文学部博物館公開講座

「荘園と歴史的景観」

期間

11月9日・16日・30日・12月7日の各土曜日

演題と演者

「大和国の古代荘園」

文学研究科助教授 吉 川 真 司

「太子の荘園—法隆寺領播磨国鵜荘—」

兵庫県立歴史博物館学芸員 小 林 基 伸

「俊乗坊重源と播磨国大部荘」

文学研究科助手 川 端 新

「荘園景観保存の思想」

文学研究科教授 大 山 喬 平

受講者数 57名

(文学部)

○大学院エネルギー科学研究科公開講座

「エネルギーと社会・環境・技術」

期間

11月9日(土)、11月16日(土)

講習科目及び講師

「熱エネルギーの有効利用と環境保全」

教授 池 上 詢

「プラズマと核融合エネルギーの生成」

教授 若 谷 誠 宏

「21世紀における資源エネルギーの安定供給」

教授 西 山 孝

「エネルギー社会工学・幸福論」

教授 新 宮 秀 夫

受講者数 70名

(大学院エネルギー科学研究科)

お知らせ**経済研究所公開シンポジウムの開催**

経済研究所では、下記のとおり公開シンポジウムを開催します。ご来聴を歓迎します。

東アジアの「奇跡」は〈幻〉なのか

20世紀も残りわずかとなり、21世紀の世界がどうなるのか、さまざまな展望が語られるようになっている。こうした中で、しばしば「奇跡」と呼ばれるほどの高成長を遂げてきた東アジアの経済成長の持続をめぐる世界的な関心が寄せられている。

スタンフォード大学のポール・クルーグマンは東アジアの経済成長は〈幻〉であるとして、東アジア経済の潜在成長能力に疑問を投げかけている。またこれまでの高成長の持続によって、東アジアの経済には、産業公害、環境問題やエネルギー制約などの成長制約要因も顕在化していることも確かである。さらに1996年上半期には、韓国やタイなどの一部の国では輸出の増勢の顕著な鈍化、成長見通しの下方修正のような事態も生まれている。はたして東アジア経済のダイナミズムは今後も続くのだろうか、そして世界の「成長センター」として世界経済の発展に寄与し続けることは可能であろうか。可能であるとしたらその条件は何であろうか。それともクルーグマンのいうように〈幻〉に終わるのだろうか。

本公開シンポジウムは、以上の問題を多面的に検討し、間近に迫った21世紀を展望しようと企画したものです。

パネリスト

- | | |
|---------|----------------------|
| 小 浜 裕 久 | (静岡県立大学国際関係学部教授) |
| 高 阪 章 | (大阪大学大学院国際公共政策研究科教授) |
| 坪 井 善 明 | (北海道大学法学部教授) |
| 羅 福 全 | (国連大学首席学術官) |
| 上 原 一 慶 | (経済研究所教授) |

コーディネーター

- | | |
|---------|-----------|
| 佐 和 隆 光 | (経済研究所教授) |
|---------|-----------|

日時：1997年1月24日（金）午後2時～5時

場所：京大会館210号室（左京区吉田河原町15）

☎075-751-7531

一般来聴歓迎

主催：経 済 研 究 所

(財)総合経済研究所

☎075-753-7102